

【発表 NO.21】

実践発表

三者協働(小中学生・高校生・大学生)によるワンデイキャンプの取り組み

ー多文化・複言語を共有する風土が生み出す「余白」ー

寶積 應公(筑波大学), 松井 遥香(筑波大学)

1. はじめに

筑波大学は茨城県教育委員会と連携して県下の外国にルーツを持つ小中学生に対しオンラインによる日本語支援を行なっている。また、外国にルーツを持つ高校生に対し支援活動を展開している。いずれも大学生の日本語サポーターと小中学生あるいは高校生が「支援者ー被支援者」の関係となっており、「授業」としての実践である。同時に「外国にルーツを持つ」点で共通している高校生と小中学生が関わりを持つことは少ない状況であったことから、それぞれの活動を串刺しに統合すると共に「支援者ー被支援者」を超えてフラットな関係を構築することを試みた。

2. 実践の場の特徴

具体的には、大学生と高校生及び小中学生が対面で集まり「ワンデイキャンプ」と題する活動を行なった。本実践ではフィールドを「授業」の外に移し、子どもたちを管理したり統制したりするのではなく、自由に活動ができる余白のある場を提供することを重視した。その特徴は、多文化的背景を持ち、複言語環境の中で学んでいる外国人生徒支援重点校 A に在籍する高校生たちが果たした影響・役割である。多文化・複言語が日常的に共有されている高校生集団の風土が実践の場全体に伝播し、小中学生の潜在的な力を喚起することに寄与したと考えられる。

3. 実践の目標

本実践は、三者が共に活動する場を提供することに重きを置いたものであり、役割を固定・統制することのない空間において、下記に示す目標を据えた。

- ① 小中学生が「遊び」を中心とした場において、大学生や、自身と似た背景を持つ高校生と交流し、主体性を持って場に参加することで、自己を表現できるようになること。
- ② 高校生が場をリードする場面を設定し、将来を見据えて、被支援者から支援者への役割変化を経験することで、多文化的背景を強みとして活用できるようになること。
- ③ 大学生が支援者という固定的な枠組みを超えて、小中高生と対面で関係性を築き、通常の支援活動に応用できるようになること。

4. 具体的な実践の内容とその過程

- 日時：2025 年 11 月 8 日 (土) 10:30~15:00
- 訪問地：水海道あすなろの里
- 参加者：小中学生 (18 名)、高校生 (18 名)、大学生 (19 名)
- 過程：約 4 か月にわたり、大学生は準備を高校生と共に実施した。7~8 月にかけて「夏休みの学習支援」の枠組みで大学生が A 高校を 6 回訪問し、高校生との関係性作りを行った。その後 9~10 月では、大学生は A 高校を 3 回訪問し、小中高大生が混合で協働できる活動を目指して、高校生と共に当日の内容を検討し、準備を行なった。午前は自己紹介を取り入れ

たアイスブレイクをしたのち、小中高大生が混合となるチームに分かれて、身体を動かした。午後チームごとに落ち葉アートでオリジナルノートを作ったほか、全体でのメッセージ交換を通じて思い出を作った。

5. 分析

当日の参与観察、高校生へのインタビュー、大学生に対する振り返りシートを基に質的に分析を行なった。本論では「余白」を、「支援者―被支援者」という役割が固定化されず、参加者が自ら関係性や役割を再編成できる関係的空間と定義する。実践では、指示を最小限に抑えた場の設計により、高校生が自発的に小中学生を支える行為や、大学生が支援者という立場を相対化する行動が観察された。普段オンライン支援では発話が少ない小中学生が、当日は自ら高校生に話しかけ遊びを説明する場面が記録された。高校生の振り返りには「小中学生だから…優しくしてあげるのがポイントだと思いました。問題があったらできるだけ詳しく、そして優しく教えてあげたかった」、「高校生になったらどうなるか教えてあげた」、「モチベーションがすごく上がった。日本語を学ばないといけないし、みんなと話したい」といった記述が見られた。また、大学生の振り返りから、ワンデイキャンプ後の通常支援活動において小中学生の発話量が増加したことが報告された。

インタビュー結果や振り返りシートを参照すると、高校生と小中学生、そして大学生が実践の場を活用して、互いの言語を調整し、関係性を構築しながら、能動的に参加していたことが推察された。坂本(2008)は協働学習について「他の組織や地域、異なる文化に属していたり、多様で異質な能力を持った他者との出会いが前提」とし「学習者の高い自立性と対等なパートナーシップ、相互の信頼関係の構築」のもと「学習目標や課題、価値観および成果の共有」することと定義しており、本実践は協働学習の観点とも合致すると考えられる。

6. 結果と考察

多文化・複言語が日常的に共有されている高校生集団の風土は、本実践の場全体に波及し、関係構築のあり方そのものを規定していたと推察される。高校生が有する多文化的・複言語的背景は、単なる属性ではなく、日常的に行われている能動的・主体的な言語調整や対人関係の調整の実践の蓄積によって形成されたものである。すなわち、彼らは状況や相手に応じて言語や態度を選択・調整する力を日常的に行っていたのではないだろうか。そのような言語調整を核とする関係構築の様式は、本実践の場において小中学生にも伝播し、潜在的に同様の能力を有していた小中学生が、それを部分的に発揮する契機となった可能性がある。実際に、普段は発話が少ない小中学生が自ら話したり、質問したりする場面が観察された。このことから、本実践の場では、同世代間(小中学生同士、高校生同士)そして異世代間(小中学生―高校生、高校生―大学生)の双方において、言語調整を媒介とした関係構築が多層的に展開していたと捉えられる。

すなわち、本実践は、固定的な「支援者―被支援者」の構造ではなく、各参加者が相互に調整し合いながら関係を形成する、多文化協働的な関係空間を生み出していたと考察できる。

【引用文献】

坂本 旬 (2008) 「「協働学習」とは何か」『生涯学習とキャリアデザイン』法政大学キャリアデザイン学会、第 5 巻、pp. 49-57